

湯浅八郎と二十世紀 (四)

武田 清子*

(前号の「2. [2] 国際基督教大学 (ICU) 初代学長となった湯浅八郎」よりつづく)

[3] 翼ある女性を育てた共学大学 一人間的誇りをもって

戦後、日本の教育は男女共学となった。しかし、高等教育機関において、女子大学は別として、男子校は新に女子学生を受け入れるということで、大多数の男子学生の中に少数の女子学生が異質分子のように入学を認められ、特殊な存在であった。施設の面からも、女子用トイレを急造するなど、不自然な状況で男女共学は始ったのである。

そうした一般的状況の中で国際基督教大学 (ICU) は、始めから男女同等・対等の扱いが徹底した本当の共学大学としてスタートしたのであった。そういう意味でも日本でユニークな最初の真正の男女共学大学だったといえる。教職員にも男女の地位に差別はなく、全学教授会、各科教授会などにおいても自由に対等の立場で意見が述べられる雰囲気であった。学生は男子寮、女子寮が別れていたが、互の交流もあり、クラスやクラブ活動などでは全く平等な扱いであったことはいうまでもない。

日本人の男子の教授や職員の中には、多少従来の男性優位の感情が残っていたことは、時として感じられた。しかし、学長の湯浅八郎にはそうした偏見は全然なかった。

既述のように、湯浅の母は、徳富蘇峰、蘆花の姉であり、日本最初の男女共学を熊本洋学校に於て敢えて求め、男子学生たちの拒否にあっても、教室外の廊下に坐ってでも、横井小楠の娘みや子と共に、男子学生の学ぶことを同様に学んだ湯浅初子である。彼女が弟の猪一郎 (蘇峰) の世話をかねて東京に在住した時には、慶應義塾に学び、ウェブスターの辞書を背負って通学することを誇りにしていたという話もある。上述のように、叔母矢島楯子は日本基督教婦人矯風会の創設者で、女子学院の初代院長、伯母は教育者竹崎順子、横井小楠の妻津世子、いとこで、後に矯風会の指導者と

* 本学名誉教授

なった久布白落実らを含む女傑的一族の中で育った八郎である。その上、女性の地位の高いアメリカで16年間の青年期をすごした。この湯浅八郎が国際基督教大学の初代学長となったのである。

ICUは、上述のように最初から純粋に男女平等の共学大学として、大学の人員構成も施設も整備されていた。また、大学教授の中に幾組かのアメリカ人、西欧人が家族と共に来ており、彼らの家庭にお茶や食事に学生たちはよく招かれていた。家事のアルバイトをする学生たちもいた。そこでは女性の地位の高い家庭生活を体験する機会を豊かに持った。

ICUの教授をリクルートするにあたって自分ひとりではなく、湯浅は、その夫人を伴い、2人でその人柄、学識、家庭状況などを見きわめようとした。最初の教養学部長となったクライダー教授(Dr. Carl Kreider)は、インディアナ州のゴーション・カレッジ(Goshen College, Indiana)の学者で、教養学教育(一般教育、リベラル・アーツの教育)の代表的学者としてアメリカの教育学界で高く評価される人であったが、採用を決定する前に、湯浅は夫人を伴って訪ねている。そして、エヴェリン夫人(Evelyn)や2人の子どもたちと語りあい、そのはてに、その晩はクライダー家に泊めてもらっている。このように、家族全体と交わることを通して、湯浅夫妻は、ICUファミリーとしての大学形成に貢献してくれるすぐれた家族だと確信するに至っていることは興味深い。アメリカでの募金が困難になって協力を求められると、湯浅学長は夫人同伴で出かけ、アメリカ全土にわたって諸教会を訪ね、日米間の和解と平和と協力にこの新しい大学が果たす役割を説いてまわっている。それが、ICUがアメリカ全土でひろく知られる契機となった。

大学の学生会の活動も男女同等に責任を持ってかかわっていた。ICUは、開学当初(1953年)から、学生の意見や希望を大学形成に積極的に取り入れる方法の一つとして「学生教授連絡協議会」(The Student Faculty Council、略してSFC)を設置していた。これには、大学の行政部と教授会と学生会が、夫々に3名を選出し、彼らによって構成されるSFCにおいて活発な討議が行われた。大学当局や教授会と学生会との間には、考え方のちがいや不信が生れ、緊張関係が深まるのを防ぎ、相互理解の通路を用意したいという配慮に基づいていた。学生会からも女子学生も3人のうちの1人あるいは、2人として選ばれて来ることがあり、教授会からは女性の筆者がよく選ばれた。そして、三者合体のSFCの議長に女性の筆者が選ばれて、大学当局、教授会と学生会との対立・緊張関係の解決に討議を重ね、時には、全学集会を開くことが幾度もあった。

そのような責任を女性がとることに、ICU では何ら抵抗がなかった。こうした雰囲気
がICUには50年前の開学当初からつくり出されていたことは、ICUのユニークな点
の一つであった。

もう一つ例をあげるならば、政治学者で牧師の経験をも持つデヴィッド・ブリン・
ジョーンズ(Dr. David Bryn Jones)教授の夫人メアリアンは、初代図書館長であった。
彼女はアメリカにおいて、長年にわたる大学図書館形成の経験の実績をもつ人であ
ったが、彼女によって開架式のICU図書館がつくられ、日本の他の図書館に比べて冊
数が少なくても最もすぐれた大学図書館と目されるものとなる基礎を築いた。そう
いう機会を与えたのは、勿論、幹部の人々の合議の上でのことであるが、任命したのは
湯浅学長である。そして、その後任には、皇太子の家庭教師をつとめたエリザベス・ヴァ
イニング夫人の秘書であった松村（高橋）たね氏がついた。このように初期から女性
図書館長がつづいたのである。

当時の日本社会はまだ男性優位の社会であった。その後、世界的なフェミニズム運
動がおこり、1975年には国連の「国際婦人年」が設定され、その圧力を背景として、
日本においても、1986年に「男女雇用機会均等法」が施行されるに至った。しかし、
これもまだ十分に実施されていないことは、幾つかの裁判などによっても明らかなど
ころである。しかし、こうした女性の地位に関する諸々の活動、世界的動静を経て、
今日、日本においても女性の地位が大きく変わってきていることは事実である。

男女差別がまだ根強かった終戦直後の日本社会にあって、上述のような男女対等の
学風の中で育った女子学生たち、ことに、初期の卒業生たちは、当時の日本社会に、
有能な彼女たちにふさわしい職場や大学院が用意されていたわけではなかった。彼女
らが、どのような苦勞をしたかについては、拙著、ICU五十年史（『未来をきり拓く
大学－国際基督教大学五十年の理念と軌跡』2000年、ICU出版局刊）中の「女性と
して戦後日本を生きる」の項（207-217頁）参照。ある人たちは、高等学校卒業生と
同様の取扱いを受けながら、自らの独自な道をきり拓いて行った。また、他大学の大
学院に進んでも、女性故に適正な取扱いを受けない屈辱の中で、自ら老人の福祉の問
題を研究課題として選び、孤独にたえてその問題と取り組み続け、今は「老人問題」
(gerontology)の代表的学者となっている袖井孝子さんのような人もいる。教養学部教
育(リベラル・アーツの、独自の一般教育)の基礎をつちかわれて諸々の分野に出てい
ったということが、基礎的教養と能力を身につけさせていたということにもよると思
えるが、彼女らは、おどろくほどに広い分野で活躍している。国際連合やユネスコは勿

論のこと、国内、国外の広範な分野で責任をもって創造的な働きをする女性たちが輩出している（男子学生に劣るところなく）。このことは、夫々の個性をもった翼ある女性をのびのびと育てたICUの初期からの学風に基づくと思う。そして、湯浅八郎学長はそれを推進した中心人物だったといえる。

3. 日本における文化的ルーツとしての「民芸の心」

湯浅八郎の文化的ルーツはどこにあり、何であったか？ 1908（明治41）年に同志社普通学校（中学）卒業後、18才でアメリカに渡り、青年期の16年間は、農園で働き、アメリカの基礎教育を受け、アメリカの大学で昆虫学を学び、1924（大正13）年に帰国するまでの年月は、アメリカ生活であった。また、1939（昭和14）年から1946（昭和21）年までの8年間の壮年期を太平洋戦争のためもあって、アメリカにとどまった。このように長年にわたってアメリカですごした湯浅は、まさに、日米二つの文化によって育てられて来た人である。しかし、1924年、帰国し、京都帝国大学教授になってからの彼にとって、自分の日本における文化的ルーツを確認することは、真剣な模索の課題だったのではないと思われる。

当時の京都帝国大学の教授たちは、旧制高等学校に共通であったところの教養を身につけていた。それは、新渡戸稲造校長が1906（明治39）年より1913（大正2）年にわたって、第一高等学校で推進していた人格主義的教養主義の教育が、いろいろの形で全国の旧制高等学校に影響を与えていた。さらに、その点に限らず、当時のエリートとしての学者たちは、日本、東洋、西洋の哲学、文学などを高等学校時代に学んでおり、共通の文化・教養を身につけていた。そうした京都帝国大学の同僚に対して湯浅には、自らの教養の足りなさが心の底に、一つのひけめとなっていたようである。アメリカの農園で働き、大学で昆虫学を専攻して来た自分に、当時の日本のエリートとしての大学人が共通に持っている文化・教養の欠如は、負けん気の強い彼にとって誰にもうちあけられないあせりであり、負い目であった。そのことを彼は正直に語っている。ことに、日本文化のどこに自分のアイデンティティの根があるのかということは存在をかけての問いであった。そういう問題をかかえていた湯浅が、思いがけず、柳宗悦の「民芸」に出会ったのである。これは、彼にとっての予期せぬ救いであった。

白樺派の一人として民芸運動をはじめていた柳宗悦の日本民芸展が、1929（昭和4）年、京都の毎日新聞社京都支局の会場で開かれた。これは、我が国最初の民芸展であった。それを見に行った湯浅は深い衝撃と感動を受けた。この展覧会に行ったことが、

湯浅が民芸の世界に出会った最初の出来ごとだったのである。そして、さっそく、同年、京都の有志8名で「京都民芸同好会」をつくっている。

日本における「民芸運動」は今さらいうまでもなく、白樺派(明治末から大正期にかけて人道主義的理想主義をかかげた近代文学の一派)の運動に武者小路実篤らと共に参加した柳宗悦(1889-1961)によってはじめられたのであり、彼は東京駒場の日本民芸館の創設者である。柳は、天才的芸術家による“美術”ではなく、無名の職人(工人)たちが生活の用のために作り出す日用品の中にある独自の美しさを「民芸」(あるいは「工芸」として評価したのである。

[付記]

ここで、筆者の「柳宗悦の民芸」観を少し附記しておきたい。

柳宗悦は、天才的非凡さをもつ個人の創作としての「美術」と区別して、凡庸な普通の職人(工人)が作る無銘(作者の名のない)の用器に「工芸」(民芸)の美を発見した。彼は、こうした民衆的工芸(民芸)の特質として次のような諸点をあげている。

- (1) 一般民衆の生活のためにつくられる品物であり、
- (2) どこまでも実用を第一の目的としてつくられるものであり、
- (3) 多くの需要に応ずるために多量に^{こしら}えられるものであり、
- (4) できるだけ安価なものとしてつくられており、
- (5) つくる者は教養においても、経済的にも、社会階級においても位置の低い職人たちである。

そして、柳は次の諸点を民芸の特質としてあげている。まず、凡庸だと思われる無名の工人たちがどうして美しい作品を生み出すことができたのか? 柳は、美への道は、天才的個人の才能による「自力道」に限られるのではなくて、「他力道」があるという。凡夫が「我」を去って、無心で自己を^{おぼ}え、謙虚な心をもって手を動かす時、自己を超えたところから力が与えられて、美しい民芸品が生まれると柳は考えたのである。「信と美の一如」としての「法美」とさえ柳がよぶ民芸の美を彼は発見したのである。(拙論「民芸美の発見と柳宗悦——新しい文化創造のエネルギー」国際基督教大学『アジア文化研究』7 1973年5月、後、拙著『^て正統と^て異端のあいだ』東京大学出版会、1976年に収録)。

湯浅八郎は、上述のような偶然の契機によって「民芸」の世界に出会い、深い衝撃と感動を受け、「これだ!」と考えた。そして、「民芸」を学ぼうと考え、普通の人がお勝手(台所)でつかっていた土瓶(どびん)、とっくり、しょうゆさし、壺など、名もない職人(工人)のつくった「^{けてもの}下手物」を集めはじめたのである。

京都帝国大学教授のサラリーから生活費をさしひいたあとのわずかの小使^{こずかい}でも集められると考えた彼は、京都の朝市^{あさいち}にかよった。

京都に昔からあった「朝市」、モーニング・マーケット、フランスの有名なマルシェ・オ・ピュースといったような古物市で、道具やガラクタが集められて売られている。毎月、京都の東寺の朝市は21日、北野天満宮は25日というように日が定まっていたようである。こうした朝市で集めたものの中に、大工が自ら造った「墨壺^{すみつぼ}」がある。これは、大工が真直な線を引くためにつくったもので、夫々に個性的なデザインを彫りこんだ名作ともいうべきものである。これを湯浅は多数集めていた。大工や火消しらが身につけた波被^{はっぴ}類、江戸時代に用いられた有明行燈^{ありあけあんどん}、木綿の織物、くず糸の色美しく織られた「くず織」もあった。古道具、ガラクタを売る老婆がそれを包んで持って来た風呂敷の布の松竹梅のデザインの美しさに魅せられて、彼女に懇願して売ってもらったもの（木綿地藍染）も湯浅の御自慢の布であった。大小の壺類も京都の家の玄関先だけでなく、家の床下にもいっぱい並べられることとなったのである。湯浅は、民間の民芸収集家としては、類を見ない存在となって行った。

ここで、一つ興味深い問題につきあたる。「民芸」の語を共に創案した柳宗悦のよき友、協力者で後継者でもあった益子焼きの浜田庄司（柳の亡きあと、日本民芸館長）や京都の河井寛次郎は、すぐれた陶芸家として有名になった。そして、「民芸」がポピュラーになると共に、彼らの作品、それに類する陶芸品や作品は、下品^{げぼん}の作品というよりも、まぶしいような「民芸作品」となっていった。そして、常人が誰でも簡単に安い値段で買える日常品であるよりは、値段の高い「民芸」作品、高級ブランド品のイメージをもって、世の評価を得て行ったことは周知のところである。

ところが、湯浅はそういう高級品は私の知る限り、そう収集していないように思える。一銭、二銭が問題となる朝市で彼が買い集めたものは、質素な庶民の生活が生み出した「安もの」であり、それに彼は大きな誇りと喜びを持っていた。「朝市が私にとって人間学の道場であった」（『洛味』1970年3月）という湯浅は、「大学という浮世ばなれしたいわゆる象牙の塔」（当時の大学）では想像もつかぬ庶民生活の実態にふれる社会教育の場だったのである。彼の愛した渋柿で染めた「麻のれん」も、こうした朝市を出す気まえのいい娘から12銭（15銭というのを12銭にまでまけさせるのが朝市の買い方だという技法を彼は朝市の常連より学んだ、ユーモアある買い方だったらしい）で買い求めたものだったという。

ここで、私は、柳宗悦、その名だたる後継者浜田庄司や河井寛次郎の民芸の美への

アプローチと根本的に異なるのではないが、湯浅の民芸へのアプローチ、その観点の中心というか、根底に少し相違が見られるように思える“問題”につき当る。

民芸の美、民芸の価値を見出した柳宗悦は、それが普通の職人の仕事であるにせよ、そこに他力道によって生み出される独自の美があるということはつとに指摘していた。心を無にしてろくろをまわす時、そこに人間をこえた力が働くといった。そういう意味で、彼は民芸の美の創出に宗教の力を考えていたことは事実である。

そこでは、民芸の「美」に重点が置かれていたことは、事実である。そして、彼の後継者たちにおいては、なおさら、民芸の「美」に関心が向けられ、「美」が尊まれてきたように思う。

ところが、湯浅八郎は、「墨つぼ」や「はっぴ」や「くず織」をつくった人々の「心」にひたすらむけられていたことを私は発見する。彼は朝市でガラクタを売る人の心、そこで出会う老婆や娘の「心」に感動し、それを記録している。「民芸」（ガラクタといわれるものを含めて）を創り出す人の「心」に出会うという喜びが、彼をあきず朝市に通わせたのではないか。「朝市が私にとって人間学の道場であった」（『若者に幻を』204頁）ともいっている。そこに民芸の歴史において、もう一つの新しい「地平」が湯浅によって開かれたといえないだろうか？

[付記] 湯浅記念館建設の経緯

1974年5月、国際基督教大学理事長宛に、東京都の美濃部亮吉知事より、ICUが財政的理由もあって会員制でつくっていた野川（キャンパスの一部）のゴルフ・コース跡地を都の周辺のグリーン・ベルトのために譲ってほしいという依頼状がよせられた。理事会、教授会は熱心な討議と熟慮を重ねた。ICUのキャンパス土地購入に際しての募金運動のため、後援会会長として重要な働きをした一万田尚登名誉評議員（1948年当時、日銀総裁）の賛同をも得た上、この地を「緑地公園」として、森林としての自然的環境を保持するとの堅い約束のもとに、この土地の一部の譲渡が決定された（1974年12月）。都は1975年1月9日、「野川公園」計画を発表したのである。

その代価は総額318億円であり、これが国際基督教大学創立二十五周年記念基金となり、その果実（利息）のみが大学経営に用いられてよいということとなった。そういう経緯を背景として、この年、上記の財源によって、幾つかの新しい建物がキャンパスに建設された。その中に湯浅八郎記念館（後、国際基督教大学博物館と総称し、E. キダー教授発掘の旧石器時代から縄文時代期にわたる考古学的な出土品も展示）が建設された。湯浅の集めた民芸品をおさめる「民芸館」をつくるとの提案が当局者より発言された時、湯浅理事長は、「民芸館ですか？」といぶかる反応を示したことを私はよく覚えている。「私

がICUで記念されるのは民芸品だけでしょうか？人類平和のためにと建設した大学そのものが、創設者の中の一人として私が心血をそそいだ働きだったのではないのでしょうか？」という気持が彼の心の奥底にあったのではないかという推察を、その時、私は持った。しかし、万年青年でも多少老成していた湯浅は、しばらくして、「いや、皆さんがそう考えられるのでしたら、それでも結構ですよ」と言った。そして、彼の集めてきた民芸品の重要な大半である5300点を、湯浅は、湯浅八郎記念館に寄贈した。さらに、大学から求められると、一般教育のカリキュラムの一部として「民芸の心」の講義をも熱心に行ったのである。

ここで、私は、湯浅八郎がICUの学生たちに一般教育のカリキュラムの一部として語った「民芸の心」の一部をひろい上げておきたいと思う。それは、湯浅八郎という国際的に有名な元ICUの学長が、民芸から何を学んでいたか、何を「民芸の心」と考えていたかを明らかにしたいと思うからである。別の表現をとれば、彼にとって日本文化の根は何であったか、民芸を通して彼が学んで行ったことの意味を、そして、それを若い世代の学生たちにどう伝えようとしたかを考え、記録しておきたいと思うからである。

「民芸の世界は、物を介して入ってゆくのですから、あなた方自身が物自体を見て、それとのコミュニケーションがなければ成り立たないのです。・・・物をただ物として見ているのではなくて、その物の物語る心、その物ができた社会、それを作った人々の生活、それが今、自分の人生にどのような意味を持つのか、ということを考えねばなりません」（『民芸の心』26頁、国際基督教大学博物館・湯浅記念館刊、1978年）。

彼が、京都帝国大学教授時代、「民芸」の美に魅せられて、京都の朝市をあちこちまわった頃のことを次のように語っている。

自分は帝国大学の教授として何百円かの、その当時としては最高の月給をもらっていた。しかし、朝市に通うようになって、一銭二銭というものについて教えられた。その当時、一銭二銭で生活している人がいるということ、それが日本人の大多数を占める庶民なんだということを学んだ。朝市を通して初めて日本人の実生活に触れ、教えられた。しかも、そういう生活をしている人達の中から美しい民芸品が生まれてくるということ彼は感動をもって学んだのである（同上48頁）。

湯浅が御自慢にしていた、彼の収集による民芸品の中に「松・竹・梅文」の木綿地藍染の風呂敷がある。彼がこれを手に入れたプロセスは彼にとって深い感動を与えるイベントであった。ある朝市で^{ゑび}莫産をしいて商売しているおばあさんのうしろに置

いてあったこの風呂敷を欲しいといったところ、「これは売れまへん」という。なぜなら、それは、彼女が商売道具を包んで家へ帰るものだからとのこと。湯浅は頑張っ
て、翌日でよいから 50 銭で売ってくれといったところ、おばあさんは了解した。1
円の半分である 50 銭がおばあさんには意味を持ったようで売ることを約束した。翌
朝、朝市に行ってみると、別の男の人がその風呂敷を 50 銭の倍の 1 円で買いたいと
いったという。しかし、おばあさんは 50 銭で売ると約束したことを頑と守って、そ
の人には売らず、湯浅を待っていてくれた。倍の値段で売れるものを、湯浅との口約
束を守って、売らずにとっておき、湯浅にその布を 50 銭で売ってくれた。このことに、
つまり、貧しい朝市の老婆の誠実さ、損得をこえた人間的信義に湯浅は深い感動を持
ったのである。ここに民芸の精神、民芸の心があるのだと彼は感じた。人間の生活に直
結して、しかも、誠実な、なんの偽りもない、儲けとかではない、人間と人間との関
係を大切に作る心、そこに民芸の世界があるのだと考えたと湯浅は語っている(同上
48-49 頁)。

もう一、二、例をあげてみると、徳川時代、一般庶民は絹の着物を着てはいけない
という制度があった。そこで人々は、木綿という材料だけで、唐草模様、更紗や菊の花、
松、竹、梅、雪の輪等々、工夫をこらして実に美しい布を織っている。旧約聖書の伝
道の書の第三章に、「神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた」とある。また
「神のなされることは、常に時になつて美しいという言葉もある」(同上 52 頁)。人
は根源的に美を思う思いを与えられているのではないか、それが、きびしい法度の下
でも、のびのびと美しいデザインを生み出させる源だったのではないかと湯浅は考え
ている。

もう一つ、湯浅は「屑織の世界」について語っている。屑織というのは、織屋で機
を一日織って残った糸を集め「お宝入れ」と書いた糸屑籠に入れておく。その屑糸を
その家のおばあさんが暇にまかせてつないで、毎日カタンカタンと織った。自分の孫
がお嫁に行く時にひとつのお土産にわたしてやろうと考えて織った屑織、白か赤か黒
か青か、順序もなくひき出すままに織られた作品の美しさ、孫を思う愛のこもった潜
在的な意識がそこには織り込まれている。湯浅はここに民芸の世界があり、民芸のミ
ステリーがあるという。

その他、湯浅は日本の大工たちが、例えば、曲った松の木などを組み合わせてはり
にする時、直線を引くために使った「墨壺」に興味と愛情をもち、それらを沢山集めて
いた。曲った面に墨壺から引っぱり出した糸をピンとはねると真直な線が引ける。こ

れは日本における大工の天才的な発明だと湯浅は見る。昔の大工はたいいてい自分でこれをつくった。精魂をこめて、この基本的な用具を作った。しかも、そこに彼独特の彫りものをほっている。用と美の一致である。私は湯浅家でいろいろの墨壺を見せてもらったことがある。彼は、大工のその「精魂」と「美意識」に深く心をうたれ、それらの墨壺一つ一つをつくって仕事をした大工たち一人一人と心を通わせて墨壺を集めたのである。

このようにして、湯浅は、稀にみる、こうしたささやかな労働者の仕事と生活につながる道具類＝民芸品の収集家になって行ったのであった。

『十二の石塚』（1885〈明治18〉年刊）の著者で詩人の叔父、湯浅吉郎（半月）の血を継ぐ美意識が湯浅八郎の中にも流れていたであろう。自己にとっての日本文化のルーツを模索する中で出会った日本の民衆のつつましい美意識、ことにそこにひそむ「心」は湯浅をとりこにしていったように思える。

ここに、私には、日本における民芸運動の創始者、民芸美の発見者であり、先覚者である柳宗悦（1889-1961）と民芸の素人ともいべき収集家湯浅八郎（1890-1981）との間に深い共感、共通の関心があるとともに、ある興味深い相違点、対比が見られるように思える。彼は民芸を生む人々の「心」を掘りおこしているのである。彼自身の人間学の道場として、一銭、二銭で生活するひとびとの「朝市」との出会いを通して。

【付記】（1）湯浅吉郎の『十二の石塚』は旧約聖書のヨシュア記、士師記などを材料にした叙事詩。日本最初の個人詩集といわれる。

【付記】（2）湯浅八郎と京都民芸協会との関係

湯浅八郎は、国際基督教大学の初代学長として、その独自の学風、学問共同体形成の開拓者として世に知られているが、これと並行して、民芸道の求道者として民芸を愛し、民芸を集め、民芸のころを学ぼうとする歩みが、京大教授時代の1929（昭和4）年からつづけられていたことは忘れられてはならない。上述したように、この年、毎日新聞京都支局で開催された日本最初の「日本民芸展」を見て民芸の美とその意味に出会い、民芸の世界にとりこまれてより、永眠（1981年）に至るまで、彼は民芸道の求道者でありつづけた。「民芸」にはじめて出会った1929年、彼はさっそく京都の有志8名と共に「京都民芸同好会」を結成していることは先にふれた。そして、1935（昭和11）年、東京に日本民芸館が開館されるより早く、1933（昭和8）年には、湯浅らの京都民芸同好会が、京都大丸で同人が収集した300余点を展示して第一回民芸展を開催している（戦時期に入るまで毎年開催、4回続行している）。

上述の同志社総長となり、同志社事件に巻き込まれた中でも民芸同好会の活動はつづけていたのであ

る。そして、同志社事件により総長退任、マドラス会議出席後、アメリカに渡り、太平洋戦争により予定をこえて8年のアメリカ滞在となったことは既に述べた。1946年10月帰国し、1947年4月、第12代同志社総長に迎えられたわけであるが、1947年3月には「京都民芸協会」が創立、活動が始まっている（初代会長は柳と親交のあった寿岳文章。ただし、正式設立は1948年、会長は堀内清）。河井寛次郎や寿岳文章らと親しい交わりを持っていた湯浅八郎も京都民芸協会創設に力を入れたことは容易に察することが出来る。そして、堀内清を経て湯浅は1971（昭和46）年に京都民芸協会の第3代会長に就任している（2月）。

そして、この間、京都の民芸協会に属する同好者たちは、「民芸」を求めて日本各地への旅行をしていることは興味深い。河井寛次郎を団長とした沖縄伝統工芸視察旅行、富山県八尾の民芸、瀬戸内海島めぐりの船旅、会津若松、姫路城、備前焼窯元、倉敷民芸館見学、隠岐、木曾谷、高知の民窯、美濃吉での合掌造り民家見学等々、あげるにいとまがないほど、同好会の人々は日本各地の民芸のふる里を訪ねる旅をしている。湯浅はこれら同好者仲間と台湾にもスキャンディナヴィアを含むヨーロッパ各地にも出かけている。

湯浅は、京都民芸協会の「京都民芸だより」（第3号、1977年10月）に次のように書いている。「現在私は、一人の日本人として、私の生き甲斐を、民芸の世界に発見し」ている。「民芸の世界は、私にとっては、最早、単なる物の世界ではなく、正に心の世界へと進化し、昇華した。それは物心を内蔵するもの、即ち民芸道の世界」だと。しかも、この中で彼は、「民芸の世界は一種の宗教とでも表現しなければ意を得ないように感じる」とさえいっている。「民芸の道こそ人間の道、ユニヴァーサルな真理の道」（『若者に幻を』234頁ICU同窓会、1981年）ともいっている。

そして、京都民芸資料館の建設につくし、多額の寄附もした由であり、彼の収集した品々をICUの湯浅八郎記念館と京都の資料館に寄贈した。あとは孫への遺品として自宅に残したとのことである。

4. ネパールのハンセン病院 ―そこに働く息子 洋を訪ねて―

湯浅は、1975年、85才でネパールに出かけている。それは一人息子、洋^{よう}さんが働くネパールのライ病院（ハンセン病院）の様子を見たいというのが主たる目的であった。洋はICU第一期生であるが、青年時代、彼にとって何かの経験が契機となり、それが、一生涯、ライ病患者のために働こうとの決心をさせたようである。イギリスのエディンバラの医科大学で医学（特に癩病^{ライ}に関して）を学び、卒業後、イギリスのライ病協会経営のライ病院の一つである、ネパールの病院に派遣されて働いていたのである。200人のライ病（ハンセン病）患者を収容しているというネパールに息子の生活の実態、働き方を知りたいとの思いをもって出かけたのである。ヒマラヤを見た

いというねがいもあったと彼はいつている。

当時は、まだ明らかになっていなかったが、ライ病がハンセン（氏）病と呼ばれるようになった経過を、洋さん（私は、今も“洋ちゃん”とよんでいる）からきいたことをも含めて一べつしておきたい。ノールウェーのハンセン博士（Dr. Armauen G.H. Hansen, 1841-1912）がライ菌を発見したのは、1871年であった。しかし、世はあまり注目しなかった。ところが、後年、ドイツの細菌学者コッホ（Dr. Robert Koch, 1843-1910）が結核症の病原として結核菌を確定したことが有名になった（ノーベル賞をも受賞）。それが契機となって、ハンセンのライ菌の意義が見直されることとなった由である。そして、この病気が遺伝病ではなく、病原菌によるものであり、三つの薬を結合すると、ハンセン病に有効であることが、WHOによって1981年に認められた。この会議に湯浅 洋も出席していたとのことである。洋は国際ライ学会会長（敢えて「ライ」の用語を使っているとのこと）を9年間つとめたのであり、今もこの病気のために国際的に活躍していて注目されている。彼の話によると、10年前には世界に1000万人いたライ病患者が、現在は50万人（インドに40万人、ブラジルに6万人、ネパールとミャンマーに夫々1万人程度）に減少してきたとのことである。洋は救ハンセン病運動のために一生をささげたいという決意に変わりはなく、社会的にそう知られることなく、地味な働きであるが、彼は誠実に今日もその運動のために国際的に活動をつづけている。これが彼のライフ・ワークなのである。

湯浅八郎は、まだハンセン病へとよび名も変わらない1975年にネパールのライ病患者の病院で働きはじめた息子 洋の様子を見たいと思い、80才を超えてネパールを訪れている。そして、この時、それを洋の生涯のミッションとするライ病院で元気に働く息子 洋の姿を見定めた湯浅にとって、そのネパールから見たヒマラヤの美しさは格別なものであったことが想像される。創造主である神の業の偉大さにうたれた彼は、ヒマラヤとの出会いを「ヒマラヤ霊威」と表現した。

湯浅は、エヴェレスト登頂に成功したヒラリーとガイドのテンジン（ネパール人だろう）について「宇宙の創造者、神への絶対的信頼」（『若者に幻を』ICU 同窓会、1981年）の中で次のように述べている。

「・・・地上最高の地点、8,848メートルのヒマラヤの頂点です。この登頂に成功したのは、1953年5月29日午前11時30分、登りついたのは誰かという、ニュー・ズィーランド生まれの英国登山家ヒラリー卿です。登山家のヒラリー、『なぜ山に登るのか』といえば、『山があるから登るんだ』と言った、かのヒラリーです。もう一人、同時

に登頂したのは、ヒラリーの生命を、自分の生命を賭して守りぬいて案内したシェルパ、テンジンです。

人類として初めて地上最高の地点に立ち得たという感激と誇りと、その満足感をヒラリーは、何と表現したか。“We conquered Himalaya”『我、ヒマラヤを征服した』と。機械文明の先端をゆく英国を代表した現代人らしい表現だったと思います。しかしながら、命をかけてヒラリーを守り導いて登頂に成功させたテンジンは、『このヒマラヤの最高峰エヴェレストの頂点に立って、私は神の偉大さを思った』と言ったということです。そして、遙かに見おろす山すそにあるラマ教の寺院で、明けても暮れても祈りに献身している人たちのことを念頭に浮かべた、と。何というコントラストでしょうか」（同上 45-46 頁）。

ここにはテンジンの言葉に胸うたれた湯浅のテンジンへの親近感がしみじみとよみとれる。

〔付記〕

エヴェレスト登はんに先鞭をつけたイギリスの登山家に、マロリー (George Leigh Mallory, 1886-1924) という人がいたことも有名である。幾度か征服を試み、第三次遠征隊に加わった 1924 年 6 月 7 日には、山頂につながる山稜を進んでいる彼の姿が下から望見されたそうであるが、遂に帰って来なかったという。そのような先人の試みを継承してのヒラリーのエヴェレストへのチャレンジだったのである。

息子 洋を訪ねて行った時、山すそにラマ教寺院が見下ろせた。テンジンもラマ教信者であったかもしれない。恐らく学校に行ったこともない案内人のテンジンが、地上最高のエヴェレストの頂点に立った時、「神の偉大さ」を讃美した、この言葉こそ、神に創造された人間の言葉として精神的インスピレーションを的確に示すものと湯浅は感じたのである。

湯浅のテンジンへの親近感は、上述した ICU のキャンパスに平和を祈念して置いた石碑の上に刻まれた幾人かの人の名のうち、40 万坪の ICU キャンパスの一木一草を大切に守ってきた園丁（ガーディナー）の宮沢吉春さんへの愛敬に通じるものがあるように思える。

ハンセン病（ライ病）患者のために献身的に働く独り息子の洋を訪ねてのネパールの旅、そして、そのネパールから見るヒマラヤの神の創造の偉大さ、美しさとの出会い、これらの感動の総合が、湯浅にとっては「ヒマラヤ霊威」と表現させたものだった

たのではないかと私には思えるのである。

5. 市民大学で学び働く若者と共に ―生きることは愛すること―

晩年の湯浅八郎の活動で私が興味深く思うのは、1969年、79才ころ、偶々講演をたのまれた「大阪市民大学センター」（大沢静山氏が代表）の若い人たちとの交流が永眠の二週間前までつづけられていることである。しかも、それは、「我が人生を語る」をテーマに3回ほど講演をした後、彼らとの合宿ゼミナールを9回も行っている。この「大阪市民大学センター」という集りは、主婦や製菓業者や電気メーカー勤務者や商社マン、会社員、繊維卸業者、銀行員、幼稚園の教諭、船舶業、学生、事務員、家事手伝、保父、公務員、学生、村役場勤務、郵便局員、^{きりがねし} 截金師、看護学校教員等々、いろいろの職業につく若い人々のための市民大学である。

中心人物である大沢静山氏の人柄と理念にもよることかと思うが、いろいろの講演者を協力者としてこの小さな群の勉強会が20年も続いていることは珍しい（私も招かれて講演に行ったことがある）。このグループの2、3泊の合宿ゼミナールに「人生の創造」、「私と人生」、「民芸のこころ」等々のテーマで、奈良県立青年の家、和泉青年の家、唐崎ハウス、東淀川勤労者センター、三井寺等々で1971年から1981年まで殆んど毎年、時には年に3回も3泊4日の合宿ゼミナールを湯浅はつづけて行っている。「自分に来てほしいと望んで下さる所ならどこへでも行きます。もし仮にそこで死ぬようなことがあっても私は満足です」と語った。そして、永眠の2週間前には、風邪気味だったので、「おやめになっては」との家族の言葉にも、「いや、約束しているのだから。大丈夫だ」といって、岐阜県郡上郡和良村での合宿にも出かけ、合宿、講義をすると共に、生れてはじめての魚釣りにも興じたりしている。

これらの講演や合宿では必ずはじめに、さきにもあげたところの（「湯浅八郎と二十世紀（三）」56頁、『社会科学ジャーナル』第51号 所収）、彼の「生活信条」を語っている。

生きることは	愛すること
愛することは	理解すること
理解することは	赦すこと
赦すことは	赦されること
赦されることは	救われること

この会の事務局員としてお世話をした人の記録によると、お話は大体いつも同じような内容であった。しかし、毎回、新しい力がこもっていて、新しい話をきくような感動を覚えたといっている。出席者たちの感想文をよむと、「あの小さな身体のどこにあのような気迫が潜んでいるのだろうか？どこからどうしてあのような力が出るのかと考えさせられた」「合宿から帰って私の生命に対する考え方が一変していることを見いだした」(会社員)。「話をされる時、眼光の鋭さは形容し難いものがあった。少しの時間も惜しんで若者はどうあるべきかを話された」(公務員)。「合宿の宿舎に着いた時、一人一人に“有難う”といわれ、握手してくれた時の感激、私たち一人一人を本当に大事にされ、慈しみ、そして御自分には厳しかったように見受けた」(電気サーヴィス業)。「かけがえのないあなたの人生、それを大切にしなければなりません。今の瞬間は永遠の第一歩です」「あなた方は今、人間として誠実に真剣に生きていますか」と時として机を叩いて問われ、「私も一生懸命生きていかなければと思った」(家事手伝)、「私は人間として、正しさ、清らかさ、美しさ、素晴らしさをもう一度見つめ直さなければと考えた」(会社員)などと書いている。『あなた方は本当に心の拠り所を持っているの?』といわれ、大勢に語りかけておられても、まるで私ひとりきりがねしに語られているように、弱い私の中に入って来られる先生」(郵便局員)と記している。截金師の青年は、「湯浅先生との出会いは、19才の冬の合宿だった。そして、その合宿は、私のそれからの心情に、生き方に大きな影響を与えた。私の求めている本当に美しいもの、それはどんな場合にもきつとあるという確信を心中にしっかりと持ったような気がする」と書いている。

80才代になった湯浅が、こうした青年たちの合宿に、それが和泉であれ、奈良であれ、唐崎であれ、淀川であれ、岐阜の田舎であれ、求められれば、出かけて行って、熱弁をふるい、疲れると別室で横になって休み、また、語るという指導をつづけている情熱は、とどまるどころがなかったのである。

91才で岐阜県郡上郡和良村というところでの合宿では、若枝農園という農園でも掘りをし、また、記念の植樹もしたという。この合宿は、1981年7月24日から26日までの期間であり、上述のように風邪をおして出席し、生れて始めての魚釣りなどを楽しむなど、青年たちとの交わりを深めた。「久しぶりに心の故郷に帰ったような気がする」と言ったとのことである。湯浅は、その約20日後、1981年8月15日に京都の自宅で安らかに永眠したのである。

センター長の大沢静山氏は(現国際生涯学習文化センター長)は次のように書いて

いる。「・・・合宿や講座、その他の課外活動などを通じて、私たちに人間として生きる為の多くのことを教えて下さいました。時間の許す限り、燃えるような情熱をもって、私たち一人一人に、世界を、人生を、愛を語って下さいました。・・・」

敬愛した湯浅先生の突然の死に衝撃を受けた彼らは、湯浅からくりかえしきいた「青年に幻を」(Vision to the Youth)の言葉を生駒石に刻み、記念の石碑を建立している。

この関西の小さなグループの青年たちの記念碑建立のプロセスは印象深い。文集班と記念碑建立班とにわかれ、建立委員会の人たちは専門家や石屋さんたちとも相談し、関西を代表するのが生駒石だとわかり、それに決定した。カメラに収めた石の数は200枚以上にのぼるほど、あちこち探しまわった上、重さ6トンの生駒石を遂に発見、高速道路ではオーバーヒートするというので、一般道路を大型トラックでそろそろ走り、岐阜の和良村へ運んだとのこと、そして、「青年に幻を 八郎」下に英訳で「Vision to the Youth」の言葉が美しくレイアウトして刻まれた銘板を大きな黒茶色の生駒石に形よくはめこんで仕上げたのである。周囲の山々の緑に囲まれ、空の青さに溶けこんで、どっしりとした石碑の姿に皆感動したと記録されている。

『生きることは愛すること』と題する湯浅八郎先生追悼記念誌の出版(1983年10月3日)と共にこの記念碑の建立は深く私の心を打つ。

この小さな大阪の市民大学とよぶグループの語るエピソードがある。彼らの幾人かは1981年9月27日、ICUで催された湯浅八郎の追悼式に関西からわざわざ来て下さったのである。そして、式後、湯浅より度々きいたICUの平和の記念碑を見ようと広大なキャンパスを歩き始めた。次第に夕暮れが迫っていたが、学生、先生方、守衛にまできいたが誰も知らない。夕闇の中を懐中電灯で探したがどうしてもわからず、帰途についた。その半年後、八王子に実家のある一青年は再びICUを訪ね、民芸のコレクションを収蔵、展示している湯浅八郎記念館は勿論見学したのであるが、湯浅がどのように度々語った「記念の石碑」を探しまわった末、ようやく図書館の前の松の木の下にあるのを発見したという。思ったより小さかったので見過していたのだと書いている。湯浅学長が非常に大切に考えていた図書館の前の松の木の下に石碑はICUの人々には忘れ去られているようであるが、大阪での合宿などで湯浅八郎の話を中心にきき、親しく交わった青年が、熱心にそれをキャンパスに二度、三度と来てその「平和の石碑」を遂に見つけたということに、私は深く胸を打たれるのである。

丁度50年前にICUに入学してきた戦後の青年たちに、平和を、人類愛を、世界人権宣言の大切さを説き、神と人ともに使える人間であれと語りつづけた湯浅八郎は、死

の直前の91才になるまで変わることがなかったのである。

6. 晩年、家庭における湯浅八郎

湯浅八郎の晩年の家族にかかわるエピソードなどを二、三附記しておきたい。

晩年の湯浅は耳がきこえ難くなっていたが、至極元気で活動的であった。国際基督教大学の理事長を死に至るまでつとめ、上述のように、独りで、京都から東京へ新幹線で通った。湯浅にとって清子夫人は欠くことのできないよき伴侶、大学形成のためのよき協力者であった。清子夫人は、草創期のICUの募金活動、内外の大学支持者たちのお宅での食事をもってのもてなしなど、初代学長の仕事を明るく、にぎやかに、献身的に助けた方であった。この夫人が1972年4月に永眠。夫婦ともにそれを予定していたので、京都大学病院の白菊会に献体された。そのために葬式は行わなかった。

次の月の1972年5月10日に、洋と裕子（ICU二期生）夫妻に孫の洋子が誕生した。洋は主として単身でネパール、その他の地に行っていたため、湯浅は、夫人亡きあと約10年間を裕子、洋子母子と共に京都下鴨の家で生活した。「ミセス・ユアサは料理が上手だったが、裕子も清子におとらず料理もうまいし、人柄もしっかりしている。あのような女性を育てるとは、ICUの教育はなかなかのものだと思うよ」と裕子さんをほめていた。孫の洋子についてであるが、同志社事件の紛争の中で、よく看病をしてやることも出来ずに、難病で死なせた幼い一人娘 洗子の死は湯浅にとって何年たっても忘れられない悲しみであった。私は、その悲しみについて幾度きかされたことか！ところが、孫の洋子の出現は、湯浅にとっては、洗子の再来と思えたようである。老いた湯浅は、洋子ちゃんを「洗子ちゃん」と呼ぶことが多く、洗子と考えていたふしがあったと洋は語っている。これは、湯浅にとって大きな慰めであり、心の癒しだったのでないかと思える。偶々、洋も帰宅していた日、朝食に彼の居間である二階から降りてくるのがおそいので、洋子ちゃんが二階のおじいさんの様子を見に行ったり、倒れていた。これが湯浅の静かな最期だったのである。

彼の死後、二階の彼の書斎の机の上に、前夜書きかけていたらしいハガキに、「また、ネパールにゆきたい」とあった由、「洋は今もヒマラヤの見える、あのネパールで働いている。もう一度訪ねたいと考えていたのかもしれませんが」と洋は語っている。

7. 彼の残した二十一世紀へのメッセージ

湯浅八郎は、二十世紀という人類社会にとっての相剋と変革の激動期を生きた人で

ある。そして二十世紀がかかえていた幾つかの問題を身をもって体験し、また、そこから二十一世紀へと伝達されねばならない、そして人類社会にとっての未解決の課題を残して行った人である。それをたどりながら、一人の人間の思想と行動から彼の残した「子どもへのメッセージ」として読みとれるように思えるものを、一つの「ノート」として書きとめておきたいと思う。

第一に、二十世紀は帝国主義的侵略、軍国主義的専制主義が自国民をも他民族をも苦しめた時代であった。湯浅自身、そのリベラルな思想の故に「同志社事件」を通して国賊呼ばわりをされて、総長の座を追われ、自由主義の受難を象徴的に体験した人であった。しかし彼は、「彼らは私を理解してくれないが、私は彼らを理解する者でありたい」と、当時語っていた。そのことが、彼が後に書いた「生活信条」の一部に書きとどめられている。

「... 理解することは、赦すこと、赦すことは、赦されること」。

彼には苦しみはあったが、恨みや憎しみは全然なかった。平和と人間の尊厳、相互理解をもちながらの人間の自由は人類が共に守るべき原理だという信念がゆるがずに彼を支えていた。二十世紀は、この問題が問われつづけた時代であった。そして、二十一世紀も更に深刻に問われつづけている問題である。

第二に、京都帝国大学農学部の教授時代、昆虫学者としての彼は、^{エコロジカル}生態学的観点から講義をし、学際的学問方法をもって学生たちを指導した。その弟子の中から生態進化論の学問分野を開拓する学者たちが育っていった。その後、展開してゆく京都大学の生態学研究の独自の進展の背景に、小さな「一つぶの種子」を蒔いたと見ることも出来るように思える。

大学における学際的学問方法が芽を吹きはじめた時代、そして、学問・思想の自由、危機をくぐってきた時代であった（滝川事件への積極的かわりには既にふれた）。学際的学問方法は、既述のように、戦後、国際基督教大学のリベラル・アーツの教育などにより開花していったのである。そして、他の諸大学においても。

第三は、平和、民主主義、「世界人権宣言」の課題である。彼は、アジアを侵略する戦争のために、軍国主義によって日本で苦しめられた。そして、大太平洋戦争のもと、アメリカに留まっていた湯浅は、在米日本人の失業救済事業とか、太平洋岸における日系移民の強制収容所訪問などの問題にかかわりながら、アメリカの友人たちと共に、「平和問題研究会」にも参加し、第二次大戦後の平和について熱心に考えあっていた。敗戦後、国際基督教大学の初代学長になった湯浅は、平和と民主主義のために働く青

年を育て、日本社会だけでなく、世界各地へ送り出すことをICUの使命と考えていた。そして、それを熱心に学生たちに説いた。その一例は、学生の大学入学に際しては、第三回国連総会（1948年12月10日）が採択した「世界人権宣言」への誓い（pledge）を入学の必須条件としたことである。そうした使命へのヴィジョンを彼は「幻」と表現し、「青年に^{ヴィジョン}幻を」と言いつづけたのである。「世界人権宣言」は、二十一世紀になっても、さらに混迷をつづける世界の現実には、その課題、理想の実現には道はまだ遙けしの観がある。しかし、その目的のために世界各地で、また、日本国内の諸分野で真剣に働く人々の中にICUの卒業生たちが多数いることは重要であり、注目に値する。

第四は、異質の文化的・民族的ルーツ（根）を持つ人々の共生、異質の文化的土壌において、主体的に責任をもって自らもその形成にかかわる新しいコミュニティの形成の問題である。それは、太平洋戦争勃発と共に、砂漠の中の強制収容所に入れられた日系移民に対して、「今はアメリカが誤った差別政策をとっているが、アメリカはあなた方の母国だ。あなた方の母国であるアメリカをよりよい国に変えていくのはあなた方の責任だ」といって袋叩きにあいそうになった湯浅、しかし彼に共感する日系移民も多かったのである。戦後、日系アメリカ人の熱心な努力の末、米議会は公式に謝罪を決定した。日系移民は今やあらゆる分野で責任ある国民として活躍している。

また、アメリカでは、今さらいうまでもなく、黒人に対する差別は社会生活のあらゆる側面において深刻であった。湯浅らがマドラス会議のメッセージを伝えるためにアメリカの教会に招かれた時、ワシントンD.C.のレストランで、黒人である故にアフリカの代表的婦人指導者が失礼な差別を受け、シーベリー女史をはじめ、湯浅たちが赤面したことは既述した。レストランも映画館もトイレもすべて白人と黒人とは別であった。

1939年から1940年代にかけての私の学生時代、大学の夏休みにシンシナティのYWCA主催の女学生のキャンプ（数週間つづく）にカウンセラーとして働いたことがある。その時、私は、黒人女学生のキャンプにもゆきたいと指導者にたのんだ。彼女はそれをアレンジしてくれたが、離れた地域にある黒人少女たちのYWCAキャンプの門の前で私を車からおろし、2日後にここまで迎えに来るからといって、中にも入らずに帰って行った。YWCAでさえも、当時は、決して白人と黒人が共にキャンプをすることはなかったのである。私は黒人女学生たちと共に泳ぎ、いろいろのプログラムに参加して楽しい2日間をすごしたのであるが、夜、黒人の指導者たちが集った時、彼女らはいかに差別されているかを深夜にいたるまで語りつづけてきかせてく

れた。これは1940年代初期に私が身をもって体験したことであった。

しかし、アメリカでは、長く差別されてきた黒人の公民権運動が、1955年頃から黒人牧師 M. L. キング (Martin Luther King, 1929-1968) の指導のもとに展開されてきた。キングは社会悪を見抜く洞察を R. ニーバーから学び、「非暴力の抵抗」による「悪」の克服方法をインドの M. K. ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi, 1869-1948) から学んだといった。即ち、物質的暴力だけでなく、憎しみといった精神的暴力をも用いないという意味での「非暴力」による悪の克服である。彼は、アラバマ州モンゴメリーから黒人差別に対する非暴力の抵抗運動をはじめ、J. F. ケネディが大統領になった1960年代以後、白人教会のリベラル派の人々(湯浅の友人たちを含む)の全面的協力を得て、公民権運動は全国的な運動に展開した。そして、1963年8月28日、首都ワシントン D. C. における20万人の公民権運動の一大行進となったことは周知のことである。「私には夢がある」(“I have a dream”)のキングの演説は、大きな反響をよび、黒人は、遂に市民権を獲得するに至ったのである。キングは1964年、ノーベル賞を受賞したが、1968年には暗殺されてしまった。その2年ほど前、ある集会で夫々に話をたのまれ、ミセス・キングと同じ飛行機で旅をした時の思い出は今も鮮明である。常に「死」に直面しながら公民権運動の先頭に立つ夫を案じながらお産で入院する時の不安さなどを、彼女は静かに語っていた。

彼ら黒人は、今では教育においても、あらゆる社会生活の側面、大学や病院への就職、選挙権、被選挙権等においても白人と同じ権利を獲得するにいたっているのである。2000年には全米で451人の黒人市長がいるという。今年(2003年)は、このワシントン大行進から40年である。まだ、白人と黒人との間の生活程度の差、感覚的ずれは底深く残っていると思えるが――。

自由主義、民主主義を国是とするアメリカにおいても、異民族が同じ自由と権利と責任を共有する国に成長するには、犠牲と忍耐と努力と時間がどんなに必要であったか、なお、ありつづけるかを感じさせられる。

南アフリカのアパルトヘイトの克服も非常な忍耐をもつてのたまたかいを要する問題であったし、今もなお深刻な現実問題をかかえていることは事実である。

20世紀から21世紀への世界は、今日もなお、戦争、イデオロギー、民族(エスニック・グループ、トライブを含む)、宗教等々による対立と大きな人口移動(難民)の激増のまっただ中にある。異質の者の共生への道はけわしく、不可能であるかに見える。しかし、絶望する日系移民への湯浅の「勇気ある励まし」は、今日の世界に対し

でも通じる「預言者的メッセージ」ともいえるものを含んでいたように思える。

[付記]

湯浅八郎が恐らく予期しなかったであろう今日の強大なアメリカ、ブッシュ大統領の武力によるイラク攻撃、その後のテロの続発などの現実、アラブの人々をはじめ、世界各地に生存するイスラムの人々との平和的共存が、アメリカにとっても、国連につらなる世界の諸民族全体にとっても、新しい試練となっている。そしてパレスチナとイスラエルの問題も。

第五は、国際基督教大学（ICU）が「翼ある女性たち」を育てたと考えられる点である。男子学生たちも夫々にすぐれた成長をしたが、女子学生もそれに劣らず、きわ立って優れた、そして多様な人材が育てられてきたと思う。それは、例えば、最高裁判事になった横尾和子さんとか、文学者として活躍する高村薫さんとか、ハーブの吉野直子さんとかいった、いわゆるこの世的に有名になった人たちに限らない。国連、ユニセフ、その他、諸々の国際機関や NGO 等々にも次々にいろいろの分野で重要な責任を果たしている人々もいる。私が興味深く思うことの一つは、早く結婚し、よい家庭をつくり、子育ても一応終え、両親（多くの場合、夫の両親）をも見送った末、あるいは、夫亡きあと、大学院などに入り新しい分野の専門家となって活躍する人々もいることである。「おそ咲きの花」（アメリカでの表現で *late bloomer* というらしい）として社会の諸分野での責任ある活動をする人々がいることである。例えば、急死され、惜しまれるが、近年になって那須の国際医療福祉大学の語学センター長をつとめた宮尾洋子さんもそうであり、今、姫路獨協大学で重要な責任を負っている茅野友子さんもそのよき例である。あるいは、川村早苗さんのように、お連れ合いさん存命中からインテリア・デザインの専門的研究を始め、今は、夫亡きあとも立派な一流のインテリア・デザイナーとして、独自の美的感覚を生かして働いている人もある。夫亡きあと、小さな出版社を受け継いで、ハリー・ポッターを訳し、一躍、子どもたちにも大人にも愛読されるベスト・セラーを生み出した松岡佑子さんのような人もいる。女性で『中央公論』のような総合雑誌の編集長を立派に勤め上げた湯川有紀子さん、小学校4年生の子どもを夫婦で協力して育てながら外交資料館の専門家として活動する柳下宙子さんもある。こうして一人一人名前をあげはじめると、とどまるところがないように、別に世間的に有名にならなくても、その人ならではの仕事に開拓的な道をきりひらいている強靱な女性たちが育てられている。これはフェミニズム運動などのおきるよりはるか

前の、第二次大戦直後の時期から、湯浅学長ら ICU を形成した人々の「開かれた女性観」が、彼女らのふところ深くに培った人間観の種子となって開花したものだと思う。

第六は、一神教と宗教多元主義の問題である。同志社事件後、湯浅が 1938 年 -39 年、始めてアジア（インドのマドラス）で開かれた世界宣教会議（International Missionary Conference, IMC）に出席したこと、この会議においてヘンドリック・クレマーとウィリアム E. ホッキングとの論争があったことは既述した。湯浅はこの論争の主役だったのではなく、むしろ問題を投げかけられる立場にあったのではないかと推察できる。それは、20 世紀後期から 21 世紀にかけて世界の文化的グローバル化が強まる流れの中で、ジョン・ヒックらも主張するように、超越的なものへの多様な応答の仕方としてのいろいろの信仰形態に対して、もっと開かれた理解を持つべきではないかというような考え方へと受け継がれ、展開されてきている考え方である。しかし、これは前にも述べたように、無原則な宗教多元主義とは区別されるものだと思う。

こうした考え方に対して、リベラルな湯浅は基本的に共鳴を覚えていたのではないかと察せられる。彼は終始一貫して唯一絶対なるキリスト教の神を信じていた。その信仰にゆろぎはなかったと思える。しかし、他宗教に対しては寛容であり、開かれていた。「国際」(inter-national)、「学際」(inter-disciplinary)と並んで、「宗際」(inter-religious)という言葉を使いはじめて用い、それが大切な課題ではないかと語っていた。あるいは、「宗際化」を通して、キリスト教がより真実なるキリスト教になってゆくのではないかという考えを持っていたように思える。

大本教の開祖、出口ナオが入獄中、牢獄の中のゴキブリに、「ゴキブリさん、ゴキブリさん、あなたは何を考えているんですか？」（この言葉の記憶は定かではない）と話しかけたということをきいて、湯浅は深く感動したと私に語ったことがある。「ゴキブリとお話をする出口ナオさん、何て美しい。ボクは素晴らしいと思うんだ」と語る湯浅に、大本教への異和感は全然なく、皆がきたながるゴキブリと親しく対話する出口ナオという女性への深い愛敬が感じられた。

独り息子の洋がライフ・ワークとするハンセン病患者を収容するネパールを訪問した時、そのネパールから見るヒマラヤの美しさにうたれたことを、彼はしばしば語り、また、書いた。そのヒマラヤの最高峰エベレストの頂点に立った時、恐らくラマ教信者だったろう、ガイドのテンジンが「神の偉大さを知った」という言葉に深い共感を感じた。西洋人のヒラリーが「我々はヒマラヤを征服した」といった言葉よりも。キリスト者である湯浅が信じる創造主なる神の業の偉大さを思う心と通じるものを、湯

浅はテンジンに見出して感嘆しているのである。

唯一絶対なる神の前に自分は本当のキリスト者か？と問いつづけながら、神の審判とゆるしによって、まことのキリスト者でありたいと祈る湯浅であった。超越的なものに応答し、信じ、それを讃美する他の宗教の人々に対して、誠実に心を開き、交わり、そのことによって、より真実なキリスト者になってゆきたいとねがった、求道者のキリスト者であったのが、湯浅八郎だったのではないかと思えるのである。そういう意味でも、20世紀から21世紀にかけて問われつつある一神教と多神教、一神教と他の諸種教との関係にかかわる問題を、湯浅は、彼独自の考えと歩みと生き方を通して、一つの道をメッセージとして残して行ったのではないかと考えさせられる。

【筆者特別付記】

『社会科学ジャーナル』第51号54頁下より11段～6段につき訂正いたします。

"ICU(I see you), you know me" という ICU 湯呑茶碗は湯浅八郎学長の発案によると私は思いこんでいた。最近第一期生の川村（稲垣）早苗さんより、あの ICU 湯呑茶碗は、実は父上稲垣穰（ゆたか）氏の発案で、氏が益子で焼かれた作品であることを教えられた。稲垣穰氏はコーネル大学出身で、すぐれた陶芸家でもあり、湯浅学長とユーモアを共有する方であった。愛嬢を ICU というユニークな新しい大学に入れた折、あのような "ICU, you know me" の湯呑茶碗を作られたとのこと。今、二個だけ残っていた貴重な湯呑茶碗の内、一個を私に贈って下さった。御相談の上、もう一個は ICU 湯浅記念館に御寄贈いただいた。私の誤記を訂正すると共に、川村早苗さんとその父上に深く感謝をささげたいと思う。

（武田清子）

訂正

武田清子「湯浅八郎と二十世紀（三）」（本誌 51 号）に以下の誤りがありましたので訂正します。

33 頁 7 行目

〔誤〕 1941 年 6 月 18 日 〔正〕 1942 年 6 月 18 日

33 頁 12 行目

〔誤〕 しっかりした婦人 〔正〕 しっかりした夫人

36 頁 3 行目および 36 頁 4 行目

〔誤〕 コリヤン 〔正〕 コリアン

39 頁下から 5 行目

〔誤〕 北米最高峰といわれるホイットニー山を望み

〔正〕 北米高峰の一つホイットニー山を望み

44 頁 13 行目および 47 頁下から 9 行目

〔誤〕 『未来をきり拓く大学 -ICU 五十年の軌跡』

〔正〕 『未来をきり拓く大学 - 国際基督教大学 五十年の理念と軌跡』

52 頁下から 10 行目

〔誤〕 クライダー婦人 〔正〕 クライダー夫人

59 頁 (2) の 2 行目

〔誤〕 1,230,313 〔正〕 120,313

【感謝】

この度、社会科学研究所の石渡茂前所長、および、編集委員会の皆様の御親切な御配慮により、私にとって長年の宿題であった ICU 初代学長湯浅八郎先生の歩みにつき、4 回にわたって拙文を書く機会を与えてくださったことを深く感謝いたします。また、助手の大西恵子さん、石田麻有佳さんが、こまやかな気くばりをもって拙論出版のお世話を下さったことをあつくお礼申し上げます。湯浅八郎伝としては、まだまだ残された問題がありますが、他の方々によってより完全なものが後日書かれることを期待しつつ、この度はこの小論をひとまずここで終わることといたします（筆者）。

Yuasa Hachiro and the 20th Century (4)

<Summary>

Takeda Kiyoko*

1. Supplement for the article on ICU in No. 51. Women with capable "wings" fostered in a new genuine co-educational university in post war Japan under the feminist president Yuasa.
2. The inquiry into the Japanese cultural roots for Yuasa Hachiro and his discovery of the "heart" of the folk arts — the unique beauty of folk arts produced by poor commoners and workers of Japan in Edo period and the following years.
3. His visit to Nepal when his only son, Yo was working for Hansen's disease (leprosy) as his life work and the impression of the spiritual beauty of Himalayas Yuasa received as the creation of God.
4. His dedicated and enthusiastic works lecturing to the working young people of various professions in Osaka Shimin Daigaku (Osaka Citizens' School) until two weeks before his death.
5. Some episodes in his late years.
6. Closing contemplation on his experiences and encounter with the significant problems of 20th century and the messages he has left to us in 21st century.

*Although this journal usually lists family names last in articles written in English, in this case, at the author's request, we have followed Japanese name order.

